

資料渉猟余話

その130

先頃、天龍峡大橋が開通した。その以前、リニユーアルされた飯田市美術博物館において、新収蔵品「天龍峡記と天龍峡十勝」展が開かれた。展示された貴重な書や資料は、川路素(通称希八郎)との故関島長輔氏寄贈の品で、かねてから私が見たいと思っていたものだった。

これらの作品は、当地にとって特に意義深いものだと思うので、次にその概略を記してみたい。

置県後は陸軍、文部、司法、内務各省に出仕した。他方、明六社にも加わり、明六社にも加わり、学士院議員に選ばれた。平素旅行を好み、紀行文を書く。没後、『朗廬全集』が刊行された。

朗廬に天龍峡探勝を強く勧めた。弘化四年(一八四七)、二人は、後で詳述する川路の郷医関島松泉の案内で天龍峡に遊んだ。この時、朗路は同地の峡谷美に大変感動した。

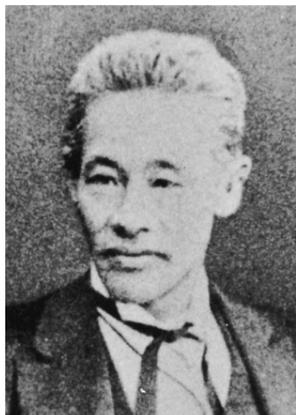
天龍峡記と天龍峡十勝

阪谷朗廬と天龍峡記

鎌倉 貞男

その朗廬がなぜ峡谷に足を踏み入れたかと言うと、帰省の途次、江戸遊学中に同門の親友だった飯田の丸山仲淑(純家)の家に滞在した

明治元年、藩主の顧問に迎え、漢学を講じた。開国論を主張した。明治元年、藩主の顧問に迎えられ、廢藩



阪谷朗廬

路は往事を回想し、少なからぬ文人を加えた作品を『花月新誌』に発表し、それが『朗廬全集』所載の新しい「遊天龍峡記」であった。内容も表現も概ね同じだが、開善寺や仲肃のことが削除され、より簡潔になった。字数も六三三

保管理していることや、天龍峡の地名が地域でも定着しつつあることを知らせた。こうして、朗廬は再び筆を執り、第二の「遊天龍峡記」を書いた。



朗廬自筆の「遊天龍峡記」

て、右の文章に推敲を加えた作品を『花月新誌』に発表し、それが『朗廬全集』所載の新しい「遊天龍峡記」であった。内容も表現も概ね同じだが、開善寺や仲肃のことが削除され、より簡潔になった。字数も六三三

「遊天龍峡記」で、その前集」所載の新しい「遊天龍峡記」であった。内容も表現も概ね同じだが、開善寺や仲肃のことが削除され、より簡潔になった。字数も六三三

この文章は、かつしつたいものである。(故人敬称略)